

## 東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

## うしとら

## 第23号

## ● 目次 ●

論点：みちのく銀行の東北アジア地域への取組 .....	1
万華鏡：ノボシビルスク技術交流事業について .....	2
Area Report [SIGNAL]：「中国」「朝鮮」「ロシア」 .....	3
吉本総長のロシア訪問 .....	4
日本館便り .....	4
国際学会参加記：内蒙古大学第4回蒙古学学術討論会 .....	5
研究機関紹介：吉林大学東北亜研究院 .....	6
最近の共同研究会・講演会から .....	7
センター動向 .....	7
会員の広場：「素顔のノボシビルスク」 .....	8

## 論点

みちのく銀行の  
東北アジア地域への取組

（株）みちのく銀行 国際部部長 星野 明



当行の海外拠点は中国とロシアにあり、中国には現地法人「みちのくファイナンス香港リミテド、武漢事務所、上海事務所の3ヶ所、ロシアは現地法人「みちのく銀行（モスクワ）」のモスクワ本店、ハバロフスク支店、ユジノサハリンスク支店の3ヶ所に開設しております。

特にロシアは、BRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国）といわれ石油・天然ガスといった天然資源が豊富でその開発が進められ、経済発展著しく注目をあびている国のひとつとなっています。

当行のロシアとの本格的交流は14年前の「ベレストロイカのロシア9000キロの旅」から始まりました。その後何度となく、ロシア特に極東地域（ハバロフスク、ユジノサハリンスク、ウラヂオストーク等）と積極的に様々な交流を行ってきました。例えば、医療器具・医薬品の提供、トーモロコシ・花の種の贈呈、中古ピアノの小中学校への贈呈、花火大会の開催等々があります。又、ロシアから日本へ小中学校生を招待するなど、人的交流も含め多面的な友好関係の構築に傾注してきました。

ロシアとの交流（ロシアだけでなく中国も含め）の狙いは、日本と最も近い国と経済交流を行うことによって、青森ひいては日本全体の経済発展に資することにあります。ポードレス世界にあって、隣国との交流は経済発展に欠かせないということです。

ご承知のとおり、サハリン州は天然ガス・石油の宝庫であり、日米欧の各国がプロジェクトに参加し開発にしのぎを削っております。特に、いわゆるサハリンⅠ、サハリンⅡがそ

の代表的なプロジェクトです。サハリンⅠはエクソン・ネフチガスと石油公団、石油資源開発、伊藤忠商事、丸紅等出資のサハリン石油ガス開発が開発主体となっております。サハリンⅡは英オランダのロイヤルダッチ・シェル、三井物産、三菱商事が開発主体となり液化天然ガス（LNG）プラント、パイプライン等の建設を行っております。

当行ではこのようなプロジェクト関連業務をビジネスチャンスととらえ、また、「家庭の銀行」として、ロシア人への住宅ローン・自動車ローン等の個人ローンを積極的に推進しているところです。

ロシアの法律では居住権が抵当権より優先するところがあるので、信頼のおける保証人をつけるなど慎重に行っております。お蔭様でお客さまからの照会、相談が多くなっております。

今後は、ロシアへ進出し営業を行っている国内唯一の銀行として、日系企業、個人とその家族との取引はもちろんのこと、ロシア企業および個人取引先に対して、可能な限りのあらゆる金融サービスを提供していきます。



みちのく銀行 ハバロフスク支店

## ノボシビルスク技術交流事業について

秋田県 産業経済労働部 技術移転促進チーム 主査 小野 正則

平成16年9月中旬、秋田県ではノボシビルスク技術交流事業を行いました。全員で11名の訪問団ですが、大きく2班編成でノボシビルスクを訪問しました。第1班（秋田県立大学武田絏一教授、秋田高専徳光直樹教授他2名）は、9月13日～25日ノボシビルスクに滞在し各研究機関を訪問して技術シーズ調査を行いました。第2班（7名）は、9月13日～18日滞在し、それぞれの参加目的に添った交流・調査を行いました。この中には、秋田県からの参加者3名（筆者含む）の他、東北アジア学術交流懇話会の会員4名も含まれています。

秋田県では、県内企業の競争力を高め、新たな付加価値の創出を支援するために、昨年6月、以前からノボシビルスクと交流のあった秋田県大の武田教授にノボシビルスクのシーズ調査を依頼したところ（筆者同行）、大変ユニークな発想の技術シーズが報告されました。そこで、更に技術シーズを探求するために、11月に東北アジア研究センターと「ノボシビルスクの技術シーズ調査」の受託研究契約を締結し、アカデミー常設展示場のカタログの日本語翻訳等膨大な成果品を受領しました。第1班は、その成果品の中から特に興味を持ったテーマを事前に抽出し、調査をするのが目的でした。

13日と14日は、基本的には全員で行動することとし、13日は、まず無機化学研究所（写真1）を訪問しました。ご存じのように、無機化学研究所の中には、東北アジア研究センター・日本館が設置されていることから、昨年度の東北大学への受託研究の段階から協力をお願いし、今回の訪問でも招聘状の発行や訪問機関との連絡調整、滞在期間中の送迎等多大な協力をいただきました。この様な協力を得られたのも、東北大学と無機化学研究所の長年に渡る信頼関係があればこそと思い、改めて感謝申し上げます。



写真1 無機化学研究所のクズネツォフ所長より、アカデミーと研究所の概要について説明を受ける

その後、触媒研究所を訪問し、最後に東北アジア研究センター・日本館を訪問し、初日の日程を終了しました。

14日は、まずアカデミーの常設展示館を訪問しました。そこで地元のテレビ放送局の取材を受け、その様子は翌朝のニュースで放送されたそうです。その後、私を含む

秋田県職員の2名はノボシビルスク州政府を訪問し、国際交流担当部長と面談、「お互いのことをよく勉強し、行政間の交流もしていきたい」旨意見交換をしてきました。

14日の最後は、秋田県出身の(株)トラスの佐藤社長の尽力により設立されたノボシビルスク初の日露合弁会社PCBテクノロジー社を訪問しました。この1年間で売り上げが約3倍に増え、生産ラインも増強されているとの説明を受け、今後も益々成長することを期待したいと思います。

15日以降は、それぞれ別行動でしたが、その中で、理論・応用力学研究所と風力発電機の開発について共同研究契約を締結したり、シベリアから飛んでくる白鳥をモチーフにした音楽「白鳥の詩」のノボシビルスク公演に向けて協力体制（写真2）が組めたりと、技術交流・文化交流の両面で有意義な交流ができたことは大きな成果であったと思います。



写真2 「日本文化センター」にて「白鳥の詩」講演

今後は、第1班の調査結果については、県内の企業や研究者に紹介して共同研究等を通じて新商品の開発等に取り組んでもらうとともに、こうした活動を広くアピールし、ノボシビルスクの魅力を県民に伝え、お互いの振興に役立てていきたいと考えています。

今回の訪問は、日本館の塩谷昌史さん・徳田由佳子さん、ならびに無機研の方々、秋田県出身でノボシビルスク在住の新田祐子さんを始めとする多くの人達の多大な尽力・協力のもと実現したものであります（写真3）。この場を借りて改めて御礼を申し上げます。



写真3 レセプション会場、今回お世話になった人達とともに

AREA REPORT

SIGNAL

**中国から** クリーン開発メカニズムは、China Development Mechanism?

ロシアのプーチン政権が批准を決定したことによって、地球温暖化対策を決めた京都議定書が発効することになった。そして、日本では、国内で温室効果ガスの排出削減を行うよりも費用が安いという理由で、途上国で温室効果ガスの排出削減プロジェクトを実施し、発生した温室効果ガス排出削減量（カーボン・クレジット）を入手する動きが活発化しつつある（このような仕組みはクリーン開発メカニズム Clean Development Mechanismと呼ばれている）。そこで、カーボン・クレジットの大量供給国として先進国から期待されていると同時に、供給独占国として他の途上国からは懸念されているのが中国である。中国政府は、他の外交イシューと同じく、目立つことはあまりしないという戦略をとりながらも、インドなどに出遅れるのは嫌だというのが本音である。したがって、出だしはもたつたものの、最近はかなり積極的に売り込みを行っている。しかし、京都議定書の後（2013年以降）の枠組みが全く白紙であるなど、クリーン開発メカニズムに関わるリスクは大きい。したがって、

China Development Mechanismではなく、単なるComplicated Development Mechanism、あるいはCarbon Dealer's MechanismやCarbon Dumping Mechanism、そして究極的にはCrazy Dreamer's Mechanismになってしまう可能性も決して小さくない。  
(明日香壽川)



写真は、1998年の気候変動枠組み条約第7回締約国会議での途上国グループ（G77）の代表たち（前列左から3人目が中国代表）  
Photo courtesy of Leila Mead/IISD

**朝鮮から** 東明王陵での眩暈

平壤平野を訪れたのはもう咲き始めようとしている稲の花の時期であった。市内を抜ければ山影など遠すぎて見えない。聞けば数日前には大雨に見舞われ、方々で洪水もあったと言う。しかし、西や東に延びる緑の絨毯はいつそうみずみずしく、豊かな実りを予感させた。南西へと国道が伸び、一路「東明王陵」に向けて車は走った。伝説要素の多い高句麗初代の東明王すなわち朱蒙の陵墓と言われている。5世紀前葉、平壤遷都にともない始祖の墳墓も移されたというわけである。今は松林の中にあつて、聖地としてその偉容を誇る。何よりも驚かされるのは、その左右と後方の松の木が傳くかのように陵墓に向かって傾いていること。東明聖王とも称して、これを始祖として崇めてきた民族がここに一国を営んでいる。この「聖」には、「国家の地方史」とか「政治史」といった議論など受け容れない、人々の永い間の情念が込められている。

「歴史観」の問題を超越している。

強烈な夏の日差しからようやく逃れ、松陰に入るとその独特の匂いが木漏れ日の中を漂い、一瞬眩暈を覚える。陵の基部に沿って周回するにつけ靈気すら感じるの、かの「情念」に中つたからであろうか。はたまた神秘に満ちた朱蒙一代の伝承に対する知識が一種の暗示として、あるいは先入観になって私を襲ってきたからであろうか。



(成澤 勝) 東明王陵の墳丘とその境内の門

**ロシアから** 自由か安全か

日本での一年間の勤務の後、私は故郷ロシアのセント・ペテルスブルグで休暇を過ごした。私の帰国直前、バスランの悲劇が起り、国内に非常に深刻な影響をもたらした。大統領による知事の任命のようなことばかりでなく、ロシア議会は約40件の法改正について審議している。これらは市民の日常生活に関わるものである。右の表は主要な法案とこれに対する賛否を示したものである。

10月1日から、ロシアの空港において新たな規制が実施された。空港への進入には、パスポート審査、荷物・上着のエックス線検査、金属探知機による検査及び警官による身体検査が義務化された。また検査の際には精神分析医がたちあう。より厳重な検査は搭乗の際にも実施され、靴のエックス線検査も求められる。プルコヴォ第二空港でのこれらの検査は、私がセント・ペテルスブルグで経験した唯一の個人的自由の制限であった。それ以外は従前通りであり特段のものはない。

提案内容	目的	反対意見とその理由
連邦治安機関の許可なくテレビでテロリストの行動及び犠牲者の報道を行うことを禁止	パニック、テロリストの宣伝及びテロリストへの情報供与を避ける	情報の自由の制限であるとしてマスメディア及び人権団体が反対
光学的及びデジタル文書保護及び個人的身体情報を含む新しいパスポートの導入	整形後におけるテロリストの識別	宗教団体が「電子的強制収容所」などとして批判
困難な人口状況を抱える都市への立ち入り・滞在制限	不法入国者に対するより効果的な監視	モスクワなどの大都市の閉鎖であり、憲法違反であると多くの人が考えている
公証人による自動車などの利用権の承認	テロリストにより用いられた自動車の所有者の迅速な発見	自動車の販売・移譲を複雑化させるとのドライバーの主張
地下鉄・駅・公共の場の安全管理の強化。金属探知器及びガス計測器の設置。空港の安全管理の強化。	群衆にまぎれたテロリストの発見	地下鉄のラッシュの深刻化。空港においてはフライトの遅延、チェックインと搭乗の遅滞
死刑執行猶予の廃止	テロリストに恐怖心を起こさせる	国際的反応。自殺の防止には無効。
銀行の管理。2万ドル以上の支払いの2日間の遅延の可能性。	テロリストの資金調達との闘争	銀行の反対。旅行者に困難が生じると主張。

(サバリ)エフ

## 吉本総長のロシア訪問

吉本高志総長は、磯谷桂介総長首席補佐、ならびに、東北アジア研究センター・スタッフとともに、本年7月14日から18日までロシアを訪問されました。

主な訪問先は、シベリアのノボシビルスク市にあるロシア科学アカデミー・シベリア支部、同支部内の東北アジア研究センター・シベリア連絡事務所（通称「日本館」）の視察、および、ノボシビルスク国立大学、さらに、モスクワの日本大使館です。



ノボシビルスク国立大学訪問の記念写真

吉本総長は、ロシア科学アカデミー・シベリア支部の「学者の家」で開催された金研川添良幸教授主催の国際会議ACCMS-2で挨拶され、その後、クリパーノフシベリア支部副総裁との会談、さらに、昨年交流協定を締結したノボシビルスク国立大学のディカンスキー学長と会談しました。

また、日本館（1998年に開設された東北大学初のリエゾン



日本館視察で駐在員から説明を受ける

オフィス）を視察して塩谷駐在員から活動状況の説明を受け、さらに、同館が設置されている無機化学研究所のクズネツォフ所長から、東北大学と同支部との長い交流について説明を受けました。

一方、吉本総長は、モスクワの在ロシア日本大使館で野村一成大使と有意義な懇談をされました。さらに、帰国直前に立ち寄ったモスクワ大学で偶然にバシリエフ教授にお会いすることができ、同大学内にある東北大学リエゾンオフィスの訪問も実現しました。

今回、吉本総長は初めてロシアの大地を踏み、駆け足ながらロシアの学術拠点を視察され、学術交流を推進されたこと、また、我が国有数の大学のトップとして日本とロシアの学術交流について大使と意見交換されシベリアの重要性を再認識されたこと、さらに、ノボシビルスクの学園都市と、ロシアの最高学府を象徴する巨大な建物を有するモスクワ大学の視察など、今後の本学の発展に寄与する成果が多くありました。

（工藤純一）

## 日本館便り

nihonkan-dayori

東北アジア研究センターは昨年の11月から今年の2月まで秋田県から「ノヴォシビルスクの技術シーズに関する調査研究」という受託研究を引き受けました。秋田県には産業労働部・技術移転促進チームがあり、県内で新たなビジネスを促進する事業を進めておられます。その部署がノヴォシビルスクのアカデミー・タウンに関心を持たれ、ロシア科学アカデミー・シベリア支部の研究成果が秋田県内の企業の開発や新規事業創生に繋がるのではないかとこの考えから、東北アジア研究センターへ調査を依頼されました。この調査は日本館を中心に、センター内部では岩山健三氏と徳田由佳子氏そして私の3人のチームで行いました。調査結果は大部の報告書にまとめられましたが、調査内容は一年以内に外



部に公表できないとの契約です。しかし、一年後には公開可能となりますので、東北アジア懇話会会員の要請があれば来年以後情報提供は可能となります。

この調査結果を基に秋田県は9月中旬より約2週間専門家を含む代表団を派遣して、技術移転の可能性を探られました。この代表団の派遣について東北アジア研究センターは後援者となっていませんが、日本館の置かれている無機化学研究所が正式な受け入れ機関になっていることもあり、個人的に調整役としてお手伝いしました。当初は日本からモスクワ経由でノヴォシビルスクに到着される予定でしたが、昨今のロシアでのテロ続発のため、急遽韓国およびウラジオストック経由での到着に変更されました。ノヴォシビルスク滞在中に、秋田県代表団は精力的にシベリア支部の研究成果を調査されました。今回の訪問により、シベリア支部の技術シーズを秋田県の新規事業に活かされ、ノヴォシビルスク州と秋田県との関係が将来的に発展することを願っています。

（塩谷昌史）

## 国際学会参加記

## 内蒙古大学第4回蒙古学学術討論会

東北アジア研究センター 教授 栗林 均

本年8月16日から20日まで、中国内蒙古自治区の中心地フフホト（呼和浩特）市において、内蒙古大学第4回蒙古学学術討論会が開催された。この会議は、1987年に第1回会議が開かれた後、1991年（第2回）、1998年（第3回）と継続して開催されているモンゴル学の国際会議であり、今年はその第4回会議にあたる。

会議の参加者は、中国内外を含めて290名に達した。地元中国のほか、日本（21名）、モンゴル（15名）、ロシア（13名）、台湾（4名）、チェコ（2名）、韓国、フィンランド、英国、ドイツ（各1名）から約60名の研究者が参加した。



開会式

会議の日程は、16日に登録、17日の午前中に開会式、同日午後から19日の午前中まで分科会における研究発表と討論、19日の午後に閉会式。翌20日は近郊の遺跡と工場見学のエクスカーションであった。会議の会場は、開会式が内蒙古賓館の大ホールで行われ、研究発表は内蒙古大学の理科棟のマルチメディア教室で、閉会式は同大学の図書館会議室で行われた。分科会は、「言語文字」「文学」「歴史」「その他（経済、文化、芸術、国際関係等）」の4つが設けられ、最も参加者の多かった言語部会ではさらに会場を2つに分けて予定をこなした。

外国代表の宿泊と食事には内蒙古迎賓館が当てられ、ここから会場へはシャトルバスによる送迎が行われた。

会議開催中の期間、内蒙古自治区政府、内蒙古大学、および今回の会議の運営に中心的な役割を果たした内蒙古大学蒙古学研究院の主催により、歓迎宴が開催された。

\* \* \*

なお、この会議の直後、内蒙古大学において「中国アルタイ言語学会」の創設会議と、第1回会議が開催された。この学会は中国民族言語学会の分会としてこのたび



分科会（言語部会）における発表と討論

新たに設立されたものである。モンゴル、チュルク、満洲・ツングースの諸民族の言語研究者を集めた中国の国内学会で、内蒙古大学に事務局が置かれることになった。

第1回会議では、中国内におけるモンゴル、チュルク、満洲・ツングースの言語研究の現状が報告されるとともに、アメリカ、韓国、ロシア、フィンランド、台湾、日本等の外国代表（その多くは、筆者も含めて内蒙古大学第4回蒙古学学術討論会に出席した研究者）によってそれぞれの国におけるアルタイ言語学の研究状況が紹介された。

この学会の創立に合わせて「アルタイ学叢書」が刊行された。実物は学会開催日には間に合わなかったものの、印刷・製本中の見本が10冊ほど展示され、予約を受け付けていた。ポッペ、ラムステット、バスカークフらの著書の漢語訳が大半を占めるが、オリジナルなものとしてはモンゴル語・パスパ字文献資料集等も含まれている。



内蒙古自治区政府主催晩餐会

●研究機関紹介

# 吉林大学東北亜研究院

吉林大学は、仙台と姉妹都市である長春市に位置している。現在、学部生が6万人以上、大学院生は約1万4000人（そのうち博士課程が3千人以上）、教員数は5800人余りで、全国一の規模を有する国家教育部直属の重点総合大学である。2000年6月に元の吉林大学、吉林工業大学、白求恩（ベチューン）医科大学、長春科学技術大学（もと長春地質大学）、長春郵電学院大学の五つの大学が統合され、現在の新しい吉林大学に生まれ変わったのである。

東北亜研究院は、現在世界経済研究所、地域経済研究所、政治研究所、人口・資源と環境研究所、歴史と文化研究所、図門江国際開発研究所の六つの研究所、事務室、編集部、文献情報センターから構成されている。研究院全体は80人近くのスタッフであるが、そのうち研究者（教員）が55人で、その大半が東北アジアの国々または欧米諸国での留学経験者である。

吉林大学における東北アジア研究は長い歴史を持っている。約40年前の1964年に日本問題研究室と朝鮮問題研究室が設けられたが、1980年代初めに日本研究所、人口研究所、ソ連研究所、朝鮮研究所の四つの研究機構が相次いで設立された。そして、1988年には総合研究及び学際研究の推進を図るために、東北亜研究中心が設立され、続いて1992年に図門江国際開発研究所と総合研究所が増設されるようになる。1994年4月、元東北亜研究中心から日本研究所、人口研究所、ロシア研究所、朝鮮・韓国研究所、図門江国際開発研究所及び総合研究所の六つの研究所を統合して、現在の東北亜研究院が正式に発足した。そして、2001年には従来の国別の研究所を専門分野別に再編成し、また新たに地域経済研究所を設け、現在の研究体制となっている。一方、東北亜研究院は1997年に国の「211プロジェクト」（21世紀に全国で100の重点学科を建設するプロジェクト）に選定され、1999年12月には国家教育部の第一期全国15の「人文社会科学重点研究基地」に指定されている。そして、現在、各分野の研究が活発に行われている。

（中国）吉林大学東北亜研究院副院長 教授 尹 豪

研究院には大学院生が300人以上在籍している。マスターコースとドクターコースに、毎年100人以上が入学しているが、マスターコースには、世界経済、地域経済、人口・資源と環境経済、人口学、国際政治、世界歴史、世界文学があり、毎年50人以上が入っている。一方、ドクターコースには世界経済、地域経済、人口・資源と環境経済、世界歴史の四つの研究科があり、これにも毎年約50人が入学している。ほかにまた、社会人マスターコースもあり、約20人が年々入っている。近年は、留学生も増えているが、主に韓国から来ている。

東北亜研究院の編集部では現在「東北亜論壇」、「人口学刊」、「現代日本経済」の三つの学術雑誌を刊行している。「東北亜論壇」は、1992年に創刊された東北アジア問題の総合研究誌で、経済、政治、文化、歴史など広範な分野における東北アジア及びアジア・太平洋地域の研究成果を発表している。「人口学刊」は1979年に創刊され、人口研究を主な対象としているが、人口関連の研究成果も多彩に掲載されている。「現代日本経済」は1982年に創刊されているが、主として日本経済に関する研究内容を掲載している。三誌とも隔月刊雑誌であり、国内外に公開発行されている。また、文献情報センターには、日本、韓国、ロシアの雑誌、図書資料などの蔵書が豊富である。

当研究院では国際交流も活発に展開されている。日本、韓国、北朝鮮、ロシアなどの多数の大学及び研究機構と提携関係を結んでおり、多様な研究者の交流が行われている。毎年国際シンポジウムを開催しており、二国間または多国間セミナーも組織されている。

最後になるが、筆者は2004年6月初めから約四ヶ月間東北アジア研究センターに客員教授として滞在し、非常に有益な研究活動ができ、またたいへんお世話になった。記して心より感謝の意を表す。今後、東北大学東北アジア研究センターのますますの発展と両研究機構の相互交流の拡大を期待したい。



吉林大学本部



東北亜研究院の入っている東栄大厦

## ● 最近の共同研究会・講演会から

## 公開セミナー：人口・労働問題から見た東北アジアと東南アジア

9月24日（金）、仙台ガーデンパレスにおいて、本センター主催、国際協力機構（JICA）東北支部・仙台市・宮城県・東北経済連合会の後援によるセミナー「人口・労働問題から見た東北アジアと東南アジア——ASEAN+3の行方を人口・労働問題から見る——」が開催された。このセミナーでは、人口減少に直面する日本、13億の人口を抱える中国、GDPの10パーセントを出稼ぎ労働者の収入に頼るフィリピン、極東地区の人口減少・労働力不足に悩むロシアなど、アジアが抱える人口問題と労働力移動問題をテーマとして、本センターに客員教授として滞在中の吉林大学東北亜研究院副院長尹豪



尹豪講師（右）、早瀬講師（左）



開会の挨拶をする山田勝芳センター長

教授が東北アジアの視点から、元日本貿易振興機構（JETRO）アジア経済研究所研究主幹早瀬保子氏が東南アジアの視点からそれぞれ報告を行った。両講師からは、地域をまきこむ経済のグローバル化の中で、人口構造の変化に伴い、労働力移動の問題が喫緊の課題として浮上りつつあり、自由貿易地域の設立や経済連携協定（EPA）締結の動きなど、国境を越えた経済関係が形成されつつあることが、統計資料などを用いながら指摘された。会場からは、我が国でも関心が高まっている出生率・治安・就学生の問題などについて質問が出され、講師による応答が行われた。（岡 洋樹）

## センター動向

### ■寄附研究部門

#### 【環境技術移転（NKK）寄附研究部門】

- 渡邊 之（ワタナベ、イタル）教授：環境技術（平成13年1月着任）
- 甕叶（スエー）助手：環境政策（平成13年4月着任）

### ■現在の客員研究者

本年10月～12月の東北アジア研究センターの客員研究者をご紹介します。

#### 〈客員教授〉

##### 【国内から】

- 和田春樹（ワダ、ハルキ）教授：東京大学名誉教授・ロシア国立人文大学名誉博士、開発と社会変容の研究
- 江夏由樹（エナツ、ヨシキ）教授：一橋大学大学院経済学研究科教授、東アジア・北アジア交流論
- 田村正行（タムラ、マサユキ）教授：国立環境研究所上席研究官、ノアデータを利用したシベリアの環境解析

#### 【海外から】

- RASSKAZOV, Sergei（ラスカゾフ、セルゲイ）：ロシア科学アカデミーシベリア支部・同位体地質年代学研究所・所長、「東アジアにおける、中生代から新生代にかけての太平洋プレートの沈みこみに関するマグマからの検討」
- 関 丙郁（ミン ビョンウク）：韓国、釜山大学校師範大学教授、「日本大衆芸能受容による韓国社会の構造変動に関する研究」
- BELOSLUDOV, Vladimir（ベロスロドフ ウラジミール）：ロシア、ロシア科学アカデミーシベリア支部無機化学研究所教授、「クラストプレート構造を有する結晶のシミュレーションモデル開発」

#### 〈客員研究員〉（新たな着任者のみ）

- Ookhonoi Batsaikhan（オーホノイ・バトサイハン）研究員：モンゴル、「20世紀におけるモンゴルの独立と日本」

（岡 洋樹）

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです（不定期）。  
今回は、新聞記者としてご活躍中の佐々木篤会員殿に、2001年にロシアを取材旅行した際のエピソードについて執筆をお願いしました。

## 「素顔のノボシビルスク」

河北新報社編集局報道部 記者 佐々木 篤



“西シベリア低地に開けたロシア第3の都市、約160万の人口を抱えるノボシビルスク市。市場経済導入で活気づく中心部から車で約40分、ロシア科学アカデミー・シベリア支部（SBRAS）が本部を構える『アカデムゴロドク』は、シラカバの並木が青空に映える閑静なたたずまいだ。”（写真1）

2001年3月中旬、東北大東北アジア研究センターのお誘いでノボシビルスク市を訪れることができました。記事は私のノボシビルスク訪問記を5回続きで紹介した「素顔のノボシビルスク」（河北新報 朝刊、2001.3.26～30）の冒頭の一節です。

「東北に『近くて遠い』シベリアを、紀行文で紹介してくれませんか」。こんな素敵な提案をしていただいたセンターの工藤純一教授の海外出張に同行する形で、私のノボシビルスク訪問は実現しました。

出張が決まってからというもの、書店に通ってはロシアの歴史やプーチン大統領に関する書籍、果てはシベリアの旅行ガイドまで買い求め片端から読み漁りました。私にとっては初の海外出張を「にわか勉強」で成功させることができましたのも、ひとえに工藤先生をはじめ歓迎してくださったSBRASのご好意のたまものです。

特にSBRAS無機化学研究所の教授陣には家族のようなもてなしを受け、シベリア人の温かさにわれわれ東北人との共通点を感じざるを得ませんでした。日本館（写真2）に駐在していたセンターの塩谷昌史助手には昼夜を問わず通訳をしていただき、彼の協力なしには連載記事を世に送り出せなかったことを申し添えておきます。

乗り継ぎのため2泊したモスクワ（写真3）でも、旧ソ連の崩壊と市場経済導入の余韻が冷め切らない街並みを目の当たりし、私のその後の取材活動の視野を大きく広げてくれるのに余りあるほどでした。

それでもノボシビルスク訪問で得られた最も価値ある財産は、工藤、塩谷両先生と私の3人で結成した「野星（ノボシ）倶楽部」にほかなりません。グルジア産のワインに舌鼓を打ったアカデムゴロドクのレストランからの帰り道。夜更けだというのに酔いも手伝って、大声を張り上げながら仙台での再会を誓ったあの日が忘れられません。友情は3年が過ぎた今も固く結ばれたままです。



【写真1】シラカバの並木が青空に映えるアカデムゴロドク



【写真2】シベリア交流の拠点となっている日本館。右は工藤先生、左が塩谷先生



【写真3】モスクワではテロ警戒の厳しいモスクワ大の潜入取材も敢行。次世代のロシアを支える若き頭脳たち



吉本総長のロシア訪問や秋田県のノボシビルスク技術交流事業など、ロシア・シベリアとの交流は深まりつつあります。また本号では、みちのく銀行国際部部長の星野明様、河北新報社の佐々木篤様、秋田県産業経済労働部の小野正則様より記事をいただきました。あらためてお礼申し上げます。（工藤純一）

《うしろ》（東北アジア学術交流懇話会ニュースレター）第23号 2004年11月15日発行  
発行 東北アジア学術交流懇話会 編集 東北アジア研究センター広報情報委員会  
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地 東北大学東北アジア研究センター気付  
PHONE 022-217-7580 FAX 022-217-6010  
http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail: iwayama@cneas.tohoku.ac.jp